

現代精神医学の科学と精神医療

矢部 博興 Hirooki Yabe

日本精神神経学会前期理事

「科学は硬い岩盤の上にあるのではない。科学理論の大胆な構造物であっても、いわば、沼地の上に建てられているようなものだ。それは、(沼地に)杭を打ち込んで建てられた建物である (Science does not rest upon solid bedrock. The bold structure of its theories rises, as it were, above a swamp. It is like a building erected on piles).¹⁾」

長年、神経生理学分野の片隅で認知情報処理を研究してきた者として、精神医学は科学であるべきで、精神科医は科学的エビデンスのもとに診断・治療を行うべきなのは自明であると考えている。第116回日本精神神経学会学術総会でも述べたが、精神医学はどの医学分野よりも科学やEBMを求めてきた。本学会も、専門医に必要な素養としてのサイエンスマインドの涵養を掲げている。しかしながら、医療の現場にバイオマーカーを提供していないという現代精神医学のきわめて深刻な問題がある。われわれは時折それを忘れてしまう。バイオマーカーをもたない医療が科学的であろうとすれば、必然的に診断は、問診での詳細な情報収集かまたは、構造化面接や数値化された評価尺度に頼ることになる。後者の数値化は検者や被検者の主観にまみれているのだが、一度数値化された評価尺度は高度な統計技術によって科学的に信頼性が保証されていると信じられてしまう。プラセボ効果よりも複雑な転移性治癒の影響がその調査票から除外できているのか疑わしい。また、それほど確固たる尺度なら、内科でも同じ考えで評価尺度だけで胸部X線や血液検査もなしに肺炎診断ができるのかと問いたいが、答えは明らかであろう。

特定機能病院には、治療抵抗性うつ病患者さんが紹介されてくる。EBM精神医学の代名詞である構造化面接、症状評価、治療アルゴリズムに則って、治療抵抗性うつ病と診断されて治療がなされたが改善せず、修正型電気けいれん療法(mECT)を求めて紹介されてくる。このような事例が実は、嫁姑関係や同胞間葛藤などの家族病理によるうつ状態や、パーソナリティ障害の抑うつであるために薬物が効かなかったということもある。多種の抗うつ薬を十分量投与したが効果がないので治療抵抗性うつ病と診断されたのである。例えば内科疾患のアルゴリズムであったら、バイオマーカーの存在がそのような誤診を許さないだろう。皮肉なことだが、前時代のICD-9の病因論的診断法で

あれば、防げた問題でもある。さらなる問題は、たとえ本当は治療抵抗性どころかうつ病ですらなかつたとしても、mECTで一定の効果が得られてしまう点である。精神療法的に加療すべき患者さんに対しても効果を発揮するなら、安全性のエビデンスがあるmECTでもよいではないかという驚くべき発想を耳にすることもある。しかし、神経生理学に長年携わった者からすれば、脳に対する負荷を考慮して、精神療法を第一選択にすべきと考える。mECTの効果は絶大とはいえ、その機序も解明されていないというのに、効果や安全性には現在の科学のエビデンスがあるから問題はないという意見には賛同できない。精神医学には苦い経験があるはずだ。今は非難を受けているロボットミー(前頭葉白質切截術)ですら、その時代の最先端の画期的な科学的治療法であったのだ。mECTの10万分の1のエネルギーで治療する経頭蓋磁気刺激治療(TMS)が画期的な変身を遂げ、効果も匹敵する未来がきたとしたら、mECTにはどのような評価が下るだろうか? 他方、バイオマーカー候補の不適切な利用の問題もある。学際的な神経生理の学会では、他分野から光トポグラフィ(NIRS)や定量的脳波(qEEG)の臨床応用の現状に対する痛烈な批判を受ける機会が増えた。前者の科学的エビデンス確立には当教室の初期データが多数用いられており、他人事ではない。限界を抱えているこれらの技術(前者は、信号変化の大半は頭皮血流であるという指摘すらある)は、社会のなかで独り歩きしてしまっている。科学的診断を切望する患者さんたちはこれらにすぎり、メディアも煽るので、補助的診断という言葉も忘れてしまう。いずれ本学会が主導して外部識者を招いた検討などを行う必要があると考える。著者自身、ミスマッチ陰性電位(MMN)という統合失調症バイオマーカーの臨床応用をめざしている。くれぐれも限界を知り、その啓発を忘れないように誠めたい。以上、現代精神医学の科学性について述べてきたが、個人的には治療アルゴリズムにおけるバイオマーカー欠落という科学的脆弱性を代償するのは、先人たちが長く紡いできた精神病理学や力動精神医学の視点ではないかと考えている。

1) Popper, K.: The Logic of Scientific Discovery. Hutchinson, London, p.94, 1959